

「えーっと……月原恵美、普通科一年一組。成績優秀スポーツ万能、おまけに美人で髪の色が薄いから学園の中で知らない人はいないって位の有名人ね^(^_^)」

放課後……既に日も沈みメイドの作った夕食をすませた頃。大上は妖精学者の屋敷にて、学園でプリントアウトした月原のプロフィールを見ながら角川が情報網を駆使してかき集めた報告に耳を傾けていた。彼同様プリントを手に屋敷の主とメイドも同席している。

「でもその割に、友達は少ないみたい。少ないっていうか……いないって感じ？ 普段から一人ではつかいいるみたいで、特別親しい人っていうのに、誰も心当たりがないってさ^(^_^)」
信じられる？ バサツとプリントの音を立て角川が両手を広げオーバーに語るが、それに誰一人としてリアクションを起こすことはない。角川もそれを特に気にとめず、話を続けた。

「かといってイジメられてるとか、そーいう訳でもないみたい。人付き合いに積極的じゃないけど、行事とかの実行委員とかには積極的に参加したり、奉仕活動とかも熱心なんだって。だから同級生や先生には頼られてるみたい^(^o^)」

奉仕活動か……大上は彼女と図らずも接触してしまった教会での出来事を思い出していた。彼女は雑巾がけを一人で行っていたと言っていたが、それも彼女が行う奉仕活動の一つなのだろう。

やつかいだな。大上は彼女の善行に眉を……狼の姿に戻り毛深くなった眉をひそめた。おそらく彼女の慈善ぶりは信仰の深さから来ていると思われる。信仰が深ければ深いほど、信じた物が誤りであるとはなかなか認めないものだ。「魔物の全てが悪なのではない」という真実に耳を傾けてくれるのかどうか、彼女の慈善ぶりを考えると難しいことなのは明白だ。手を差し伸べてもその手を槍で斬りつけられてはたまらない。

今にして思うと……大上は顎に手を当て、今日月原と取り付けた約束のことを思い出した。不躰で怪しげな大上の願いを聞き入れたのは、彼女にとって奉仕活動の一つと捉えたではないだろうか。困っている人を見捨てられない優しさ、彼女の性格からではなく信仰心による物だとすれば……行き着いた考えに、大上は思わず溜息をつく。

「あとね……見た目通りクールなキャラしてるけど、それが嫌みじゃないんだって。むしろ素直なところが好感持たれてるみたいで……んー、素直クールって感じ？」
「なんだそれ？」

聞き慣れない単語に反応し、大上が聞き返した。

「そのまま、素直だけどクールな子。ツンデレの逆？ 萌えよ、萌えよ」
「いまいち要領を得ない角川の説明は理解は出来なかったが、今それを聞き返すときではない。大上は彼女の説明を流し、報告を続けるように促した。

「まあ、とにかく好かれる要素はてんこ盛りだけど、かえってそれが近づきがたい雰囲気にもなってるみたいね。本人が交流に積極的じゃないしクラブ活動もしてないから、誰も親しい人がいないって感じかな^(-_-)」

再度友達がいなかったことを強調する角川。どうやら彼女にとって交友がないということ自体が信じられない様子だ。

「気になるんだが……」角川の報告が一段落したところで、館の主である天道寺が手にしたプロフィールを見つめながら問いかける。「両親が殺されたらしいから、ここに両親の名前が無いのは判るが……保護者の名前も無いのはどういう事だ？」

学園が管理している生徒名簿である以上、最低限保護者の名前と連絡先は記載されていて当たり前のはずだ。しかし月原の名簿にはそれが見あたらない。未成年である以上、孤児だとしても、いや孤児だからこそ、彼女を引き取った保護者がいなければおかしい。「えーっ、そんなのわかんないよお。」

あくまで月原と同じ学園に通う生徒達からの情報を集めただけの角川に、深い事情まで調べるのは不可能。そもそも親しい人がいないという月原の事を詳しく知る人物がどれだけいるのかも疑問だ。

「その名簿は間違いなく学園のデータベースにあった奴だよ。だから元のデータから書かれていなかったって事しか判らないよお。」

有能なスパイではあるが、角川にも限界がある。データにない物まで調べる事は、彼女には無理な話なのだ。

「他の生徒の名簿には、ちゃんと記載があったのを俺も確認してる。何故彼女だけ記載がないのか……どうもこのあたりがキーになりそうだな」

そもそも彼女が言う「両親を殺された」という事件自体が謎のまま。保護者不明まで発覚しては、ますますミステリアスな様相を呈してきた。大上は顎に当てたままだった手に僅かな力を込め悩み始めた。

「あー、そうそう。彼女の住まいだけど、ケンちゃんが尾行した通り、学園の女子寮で間違いないみたい。ただ気になるのは……あそこって、二人で一部屋のルームシェア制度を導入してるんだけど、彼女は一人で一つの部屋を独占してるんだって。あつ、先に言うけど理由なんか知らないからね。」

何故？ という疑問が沸くのを予見して、角川は先に予防線を張った。新たに吹き出した謎に対し、大上はうなりながら後頭部を手でかき始めた。

「これは……もはや学園と彼女に深い関わりがあると見るべきではなくて？」

これまで沈黙していたメイドが核心部分に触れてきた。そして彼女の言葉に、大上が言葉を繋ぐ。

「それはつまり……学園と異端教団に深い繋がりがあって事で当たりってことか……」

必要項目が未記入のままでもかり通っている名簿。学園寮での特別待遇。どう考えても、角川が一人ではどうにか出来る範囲を逸脱している。学園の誰かが、あるいは学園全体が、彼女の学園での生活を支えているのは間違いないだろう。そしてそのようなサポートをしている理由は、彼女が異端教団の修道女であるから、という他に思い当たる物がない。

当初から学園が異端教団に関わりがあることを懸念していたとはいえ、生で学園の様子を見てきた大上にとってあまり信じたくはない事だ。しかしもはや、学園が大きく関わっていることは間違いなさそうだ。

「聖パトリック女学園か……パトリックの名前を持つ学園が、中で蛇を飼うとは皮肉な話だな」

「ん？ なにそれ鷹丸ちゃん。」

天道寺が苦笑混じりにつぶやいた言葉に、角川が反応を示す。

「ああ、聖パトリックってのはアイルランドの聖人だな。「アイルランド中から全ての蛇を追い出した聖人」って呼ばれているんだ。蛇ってのはキリスト連中が使う隠語で、異教徒のことだ」

キリスト教では、人類の祖であるアダムとイブをそのかし禁断の実を食べさせた蛇は邪悪な象徴とされている。異教徒もまた人々をそのかし神への道を邪魔する存在とされているため、蛇と異教徒を同一視している。

しかしこれとは反対に、キリスト教の異端派であるグノーシスでは、人類に英知を与えてくれた蛇を神聖な生き物としている。天道寺が言うように、蛇を追い出した聖パトリックの名を持つ学園内に、蛇を好み蛇そのものであるグノーシス一派が紛れ込んでいるのは確かに皮肉な話でしかない。

「実際には追い出したっていうよりは取り込んだって言った方が正しいんだがね」

天道寺は自分の説明に補足を入れた。彼が言うように、実際にパトリックが行ったのは異教となる土着の信仰を追い出すのではなく、上手くキリスト教の教えに取り入れて人々に広めた事が功を奏したとも言われている。元々キリストの祭りではなかったハロウィン等がキリストの祭りとして広まったのもこのような取り込みの結果である。

「そう考えると、グノーシスを取り込んだって見方も出来るな」

口元をつり上げ、大上も苦笑を漏らした。

「いずれにしても……洗いざらい学園のことを調べ上げた方が良さそうだ」

穏和な学園長や他の先生達を疑うのは気が引けるが、信仰という正義を信じるあまりの過ちだつてあり得る。それならば過ちを正すことがカウンターハンターの勤めだろう。

「藤美、明日からは学園長や他の先生達のことを調べてくれないか？」

「ほいほい。まっかせて。」

大上は角川に明日の指示を伝えながら、しかしそれとは別のことに思いを馳せていた。

その、ほんの僅かな沈黙を見逃さない者が二人ほど……。

「……あの顔は、女の事を考えてるな」

「そのようですね。いかにして見目麗しい女生徒を口説き落とすか……そんなことを妄想している、といった感じの顔ですね。まあなんと破廉恥なことでしょうか」

「ばっ、ちよっ、違つて！　つか、もうちよっと言い方があるだろ！」

館の住人二人からかわれ、身を乗り出して抗議する大上。確かに、女……明日約束を取り付けた月原恵美のことを考えていたのは事実だし、どう接するべきかと悩んでいたのも事実。しかしあまりな言いように、抗議の声を上げざるを得なかった。なんとというか、ハードボイルド的に許される表現ではないだろう、ハードボイルド的に。

もつとも怪しいのは学園長だろう。

翌日、大上は学園内で表向きの仕事をごなしながら昨日一日で得た情報の整理と推理を脳内で展開させていた。

異端教団カルトの修道女シスターである月原と聖パトリック女学園の繋がりは深い。これは疑いようなない事実だ。そこで重要なのが、具体的に学園の誰が異端教団カルトに関与しているのか、だ。

月原の在学生名簿に手を加えられる人物となるとごく限られており、寮の特別待遇まで手配できる身分となれば更にその範囲は狭まる。その他月原のことに限らず、学園内で何らかの異端教団カルトに関わる活動を行おうとするなら……いくつも考えられる問題点の全てを処理できる人物となると、もう一人に限られてくる。

学園内でのトップ、学園長を置いて他に考えられない。大上の推測は何度繰り返してもそこに行き着いた。もう一人のトップとなるはずの理事長は、学園の内部に関してあまり口出ししないようにしているそうだ。これは設立当初からその方針は変わっておらず、理事長は学園と外部との接点を取り持つ程度しか動いてないらしい。大上が有栖学園あしすという外部の学園から潜入できたのも、互いの理事長同士付き合があつたことにあり、それだけこの理事長は外交に力を入れていると言えた。なにより理事長を容疑者から外すもつとも大きな理由は、彼はアイルランド人であり日本国内に在住していないことだろう。故に理事長と異端教団カルトとの関わりは無いだろうと大上は推測している。

こうなれば、もう学園長を最重要容疑者として今後の調査を行うべきなのだが……大上はそう決断するまでこの推測を何度も繰り返し返していた。どうにも、あの温厚そうな学園長が武闘派グノーシス主義の一派に関わっているとは信じ難いとの思いがあつたからだが、結局は学園長を疑う方向で心を決めた。

信心過ぎて極楽を通り越す、という言葉がある。信心も懲りすぎれば本来向かうべき極楽や天国も目に入らなくなり、通り過ぎて邪道に陥おちいり害を及ぼす、という意味。学園長がこのような経緯で異端教団カルトを率いているならば、温厚ながらも一方で武闘派的な思想にたどり着いてしまった可能性は充分にあり得る……複雑な心境ながら、大上は自分をこう納得させていた。そして本当に学園長が異端教団カルトの一員なら、彼も救い出す必要があるかもしれない、とも。

カウンターハンターである大上が仕事の対象とする者達は、自分たちの利益のために魔物を刈る者が、自分達の正義に基づいて魔物を刈る者のどちらか。今回は間違いなく後者のケースで、仕事としては一番やっかいなパターンだ。信心深い故に悪を許さないという気持ちだが、武闘派という流れになつたのなら……説得は難しいだろう。月原という一人の少女だけならまだしも、学園長も含め教団まるまる説得するのはそう容易いことではない。だがそれでも、やるべきならやるしかない。大上は学園長に狙いを定めた時点で、ここまで腹をくくつた。

ならば……次に自分は何をすべきか。今後の行動に関して大上はまた悩み始める。学園長や他の先生に関する調査は昨日角川に頼んである。今日の夜にまた彼女の報告を聞くことになるだろう。それまでの間、自分がすべきことは何か？

「シスターよも四方は学園のことに詳しくあつたですね？」

角川情報網のメル友とは別口あしすに情報を集める。重なる話も多いだろうが、それだけ信憑性が増すというもの。大上は表向き有栖学園から一緒に来たことになっている同僚と二人きりに

なるのを見計らい声をかけた。

「ええ。何度も訪れてますから多少は……それが何か？」

四方と学園との繋がりについては、昨日も聞いていた。彼女が本来籍を置いている女子修道院と学園に元々接点があり、彼女は学園の行事イベントなどで度々この学園へ訪れていた、という話を。

「その……学園長はどんな方です？」

迷ったが、大上はストリートに尋ねた。四方は大上が「ある組織を追って潜入しに来た」というおおざっぱな目的は知っているが、どんな組織で、誰を追ってきたのかは聞かされていない。そんな四方に学園長の事を尋ねるのは、多少なりとも学園長と面識のある四方にとって気分の良い話ではないだろう。しかし四方に気分を害した様子は見られない。

四方は大上が ウエーブ、ウルブ 狼男 であることや彼の仕事……カウンターハンターについて理解が深く、信頼している。そもそも大上が学園に侵入するという時点で、学園や学園長に彼が疑いの目を向けることなど予測できたことだ。その時点で、自分が関わっている学園になにやら良からぬ事が起きるかもと不安にはなっていたが、とうに四方は覚悟してきたつもりだ。

だからこそむしろ、四方にしてみれば大上に全てを話してもらい、全面的に協力してあげられればと思っている。しかし大上は逆に、極力迷惑をかけるべきではないと必要以上のことを話しながらなかった。それは大上のハードボイルド……いや、そのような信念とはまた別の、彼なりの気遣いや優しさといったものの表れなのだろうが、優柔不断気味だとも言える。

「私がこの学園へ足を運ぶようになって四年ほどしか経っておりませんから、あまり詳しくは知りませんが……」

大上の性格を良く知っている四方は、だからこそあまり協力を押しつけるようなことは避け、尋ねられたことだけを、しかし出来る限り詳しく答えるようにしよう決めていた。

人の心を慈しみ労る修道女シスターでありカウンセラーである彼女だからこそその、大人の対応なのだろう。言い方を変えると、少々大上のハードボイルドが子供じみているということにもなりそうだが、そこは棚の上にも置いてあげるのが、また大人の対応というものか。

「特にこれといった大きなトラブルなどは無かったと思います……というよりも、静かな方ですね。保守派というか、自分から大きく行動されることはないようです。静かに学園や生徒の行く末を見守るタイプ、といった感じでしょうか」

保守派か……大上は心中で嘲笑した。もし学園長が異端教団カルトに関わっているとすれば、武闘派とはあまりにかけ離れている。だがかえって、武闘派やテロリストほど普段は目立たないように大人しくしているもので、そのように疑うと、ますます学園長が怪しく思えてくる。大上はそう感じ始めた自分に嘲笑していた。先ほどまではむしろ認めない方向で心が動いていたというのに、この変わり様は何だ、と。思いこむ方向が変わると一つ一つのこと違って見えるものだが、大上はここまで疑えるようになっていて自分が少し信じられないでいた。

「このような物言いは非常に失礼なのですが……」四方は眉間へ僅かにしわを寄せ、言葉を続ける。「良くも悪くも、目立たない方ですね。しかしその割には、なんといいましようか……存在感はある方だな。これは私の印象でしかありませんけど」

四方の言葉に大上も頷いた。大上は昨日一緒に学園内を回ったことや昼食時の懇談時の様子などを思い起こして、確かに存在感のある人だったと改めて認識する。

「普通に考えれば、徳の高い方なんだと言っべきなんだろうけど……」

大上は独り言のようにつぶやいた。もし彼を疑っていなければ、「徳の高い人」ですませただろう。しかし疑って見てしまうと……その存在感がより怪しく、そして不気味に見える。

「それと……あ、いや……」

大上は次の質問に移ろうとして、躊躇とまどった。

月原のことを聞くべきかどうか。この質問に対して戸惑い、そして結局言葉にしなかった。

彼女は学園長以上に重要な容疑者だ。容疑者というより、彼女が異端教団カルトに関わっているのはもう明白な事実。しかし、だからこそ、四方に尋ねるのを躊躇とまどってしまう。聞けばより四方を事件に巻き込むことになり、それを大上が嫌ったのだ。

四方は協力を惜しむような女性ではなく、むしろ積極的になつてくれるだろう。そんな彼女の性格を知っているからこそ大上に躊躇とまどいが生まれる。ただの調査なら良いが、状況によつては戦闘もあり得る戦闘派が相手だ。出来る限り巻き込まない方が賢明だろう。角川のような妖怪なら戦闘になつてもそこから逃れる術がある為まだ良いが、四方はごく普通の人間だ。魔物や妖怪には理解があるが普通の人間なのだ。おいそれと巻き込める相手ではない。

自分のことを優柔不断な男だくらいに思っているかもしれない。それでも深く追求されないだけ助かつており、またそうしてこない彼女に感謝している。黙して語らず、それでも伝わる間柄というのはハードボイルドとしてあこがれるところだが、現実は厳しい。いや、どう思われていようと結果が同じならそれで良い。

「……教頭はじめ、他の先生方の様子はどうですかね……」

大上は当たり障りのない、しかし重要な事柄に話題を変え、四方の話をついていった。

そもそも、月原のことは直接本人に尋ねればいいのだから。四方に尋ねられなかったことをほんの僅か悔やみながらも、大上は自分に言い聞かせていた。言い聞かせながら、放課後を迎えていた。

「失礼します……」

資料整理という表向きの仕事を片付けながら月原を待っていた大上にとって、彼女の訪問は待ちわびていたもの。とはいえ、それを悟られてはならない。本人にも周囲にも。

「ああ月原さん、お待ちしましたよ。さて……ここではなんですから、礼拝堂の方でお話を伺つてもよろしいですか？」

自然に、ごく自然に。自分に言い聞かせるとむしろ難しくなりそうではあったが、大上はどうか好青年ウツクヤウを演じ続けることに成功……していると自己評価していた。そしてその自己評価と実際の効果にあまり差分はない。それはただ、月原や職員室に残っている先生達が大上を良く知らないからこそ、という事ではあるが。もしここに四方がいれば……彼女なら大上の態度にぎこちなさがあることを感じただろう。

「はい……」

大上の提案を素直に受け入れ、月原は大上と並び礼拝堂へと向かった。職員室を離れた二人には知るよしもないことだが……二人が遠ざかったのを確認すると、職員室に残っていた先生達は僅かに声のトーンを落として語り合った。二人にどんな関係が？と。それはそうだろう。学園内で知らぬ者がない優等生と、昨日赴任してきたばかりの美形研修員が二人きりで……となれば、それは噂的にならない方がおかしい。あからさまにスキヤンダルを楽しむわけではないにしても、気になるのは当然だろう。気にならないのは、当人のみである。

その当人達は礼拝堂にたどり着き、最前列の長椅子に各々腰おのをかけた。さて……ここからが問題だ。大上はどう話を切り出すか迷った。そもそも変身後の姿見た目とは裏腹に女性の扱いになれていない大上。にも関わらずハードボイルドを気取るために最初の一言に変なこだわりを持ってしまう。人の印象は一言、最初の一言で決まる。ここをしくじるわけにはいかない……自分で自分を追い込みながら、大上は脳内にある貧困な語録を賢明に検索していた。

「まず、何かからお話ししましょうか」

出鼻をくじかれた。月原の方から話しかけてきた。既に今日の用件が互いに判っていただけに先方から声をかけてくることも予見できたが、しかし無口な女性だと思っていただけに、大上は不意打ちに一瞬たじろぎ……などと先制攻撃につるたえている場合ではない。

大上はすぐさま気を取り直し、また好青年を演じ始めた。

「そうですね……まずは月原さんから見た印象でかまいませんので、学園のことを伺いましょうか」

経理上に必要な話……という名目はあるが、実際には本業であるカウンターハンターとしての情報集め。それをターゲット本人から聞き出そうというのだから大胆な行いだ。しかし当の本人はそれに気づくはずもなく、大上の言葉通り研修員の役に立てるよう懸命に話してくれる。その懸命さ、熱心さは大上の良心への呵責かしゃくにもなっていた。彼女のあまりに無垢な献身に触れ、大上は自分が悪いことをしているなと思いつつも、これも最終的には彼女の為なのだと思いついて自分言いかせもしていた。

「ご存じかと思いますが……聖パトリック女学園は三十年前にアイルランドの聖人である聖パトリックの……」

淡々とした説明が月原の口から伝えられていく。非常に事務的な話し方だが、しかし要点を押さえた解説は耳に入りやすく判りやすい。またどこかこなれた感じもするが、おそらく優等生の月原は、この手の解説を何度か経験済みなのだろう。大上は月原の話、まずはじっと聞き入っていた。

話を聞いているうちに、大上は月原の性格や思考を少しずつ理解していった。角川からの情報通り彼女は何事にも熱心に取り込むようで、一言で言えば「世話を焼くタイプ」だと改めて認識した。

「それと、こちらをご覧ください。こちらは学園の主な行事イベントとその際に募った募金の総額をまとめた資料です」

何より驚くべきは、彼女はわざわざ大上のために紙資料を準備していたこと。昨日大上から声をかけられた段階で、彼女はどうかやら大上のために必要と思われる資料を一日でま

とめていた様子。その行動力はもちろん、初対面の相手にここまで熱心に世話を焼ける彼女に、大上は面食らっていた。むしろそれを表情に出さぬように努めながら。そして準備した資料も的確で、経理面で必要だろうと思われる項目は全て準備されていた。大上にとつては確かに的確な資料だが、本来尋ねたい事とは全く方向の違う資料だけに、大上の良心は更なる呵責かしやくに悩まされる。

そしてもう一つ確認できたこと。それは彼女のクールな一面。行動そのものは熱心だが、話をしている彼女自身は淡々としており、表情一つ変えはしない。的確すぎて冷静すぎて、確かにこれではうかつに近づけない雰囲気になってしまふのもうなずけた。なんというか、まさに高嶺たかねの花という存在を醸かもし出している。

もつたいないな。大上の率直な感想はここに行き着いた。何事にも熱心で気が利き、準備にも抜かりが無く、おまけに容姿端麗と来れば老若男女からもてないわけがない。にもかかわらず一切変わらぬ表情とクールな印象が、人を彼女から遠ざけてしまっている。これをもつたいた言わずになんと言えば良いか。大上は心中で歯ぎしりをしていた。

「……以上です。何か他にお聞きになりたいことはございますか？」

月原は来客大上に定例的な言葉で一通りの説明を締めた。尋ねられた大上は、しばし沈黙するより他にすることがない。彼女の的確な解説はまさに非の打ち所が無く、研修員としてはこれ以上はないという素晴らしい解説に、他の質問などありはしなかった。ただそれは経理面の、研修員としての話。

「いや、素晴らしいお話をありがとうございます。ここまで熱心に語っていただけるとは思いもありませんでしたから、もう感服するしかありませんよ。ただ……」

ただ？ 自分の説明に何か不備があっただろうか。大上の一言に月原は……むしろ表情には出さないが……僅か、ほんの僅か動揺する。

「月原さんの率直な感想もお伺いしたいんです。経理担当とはいえ、額面の数字だけを見ていてはきちんとした経営は出来ませんからね。月原さんは、この学園での生活は楽しんでますか？」

大上としては月原の個人的な話をもっと引き出したかった。むしろあわよくば異端教団カルトに繋がるような話も。その為にも、強引だが質問としては軽めの言葉を振ってみた。

「えっ……ええ。それなりに……」

ん？ なんだこの反応は。僅かにトーンの下がった曖昧な返答に、大上が疑問を感じるのは当然だろう。強引に話題を切り替えた事への戸惑いともとれるが、どうも様子がおかしい。表情こそ変化はないが、若干伏せ目がちになり、視線を僅かにそらせているのは、質問の内容自体に戸惑っているからとしか思えない。

思いも寄らぬ反応、これを逃す術はない……それは判っているが、続ける言葉が大上の中で見つからない。どんな言葉でも、この話題を続けることは彼女を追い込み傷つけることになるのは明白。目的のためとはいえ、それを判つていながら続けることが俺に許されるのか？ 大上は心中で葛藤を続けている。

「……月原さんは昨日この清掃をされましたが……」

結局、大上は話題を変えることを選んだ。ハードボイルドならもつとスマートに、的確な情報入手を心がけるべきだったかもしれない。しかしハードボイルドとして、女性を無下に傷つけて良いわけがない。いずれにしても中途半端だな。そんな自分を悔いながらも、

間違つてはいないと大上は自分に言い聞かせた。

「ずいぶん信仰に熱心なのですね」

大上としては、話題を信仰や教会へもつていき、そこから異端教団カルトに繋がりそうな話を探り出そうと試みるつもりだった。言葉としては「月原さんのような熱心な信者は生徒さんにどれほどいらっしやるんですか？」と続けるつもりでいたのだが、それを口にするとはなかった。

「いえ、私は信心深いわけではありませんから……」

当然大上は戸惑った。よもやこのような返答があるとは全く予想もしなかった。しかし驚いているのは大上だけではない。言葉を発した月原本人も自分の言葉に戸惑っている。

礼拝堂に掲げられた十字架の前で、強くハッキリとした否定。反射的に何故こんな事を……月原は自分が自分で思っている以上に、研修員の質問で動揺していたことを今更ながら悟った。そして言葉は発すれば取り返しが付かないことも瞬時に理解し、尚更動揺は強く大きくなっていくのを感じている。幸いなことに、月原は自分でも無表情なことを自覚しており、高鳴る心臓の鼓動が聞き取られない限り、激しく動揺していることまでは悟られないだろうと、願った。

さて大上はといえば……戸惑いながらも月原が動揺していることを悟っていた。表情はやはり変わつてはいないものの、口調の強さから彼女が動揺しているのだろうと見抜いていた。しかしそれだけで、肝心なことが判らない。

何故ここまで動揺しているのか。そして何故ここまで強く否定するのか。

月原には親しい友人などがいないと、角川は報告していた。その事から、学園生活を楽しめていないという可能性は考えられる。だからこそ、先の質問に彼女が戸惑ったのは何となく判るが……信仰を否定するのはどういう事か？

彼女が異端教団カルトの信者であるが故に表向きのキリスト信仰を否定したのか？ それは考えられるが、どうもそれだけではないような……大上が僅かに考え込んでしまったことで、重くなった場に沈黙が続いてしまった。

「あの、では私はこれで……」

思い空気と沈黙に耐えられなくなったのだろう。月原はすっと立ち上がり、大上に軽く頭を下げ礼拝堂を後にしようとして大上に背を向けた。

「あつ、月原さん……」

慌てた大上が月原の背に声をかける。月原は背を向けたまま大上の言葉を待った。

「……私は研修員で……実はその、私も信仰とか、そちらにはまったく疎いもので……」
何を言い出しているのだろう。大上は自分の言葉を自分で理解できていない。そもそも信仰や教会に疎いことは昨日話しているし、それを名目に今日会っているのではないか。理性が冷静に自分を見つめる中で、大上は月原へ語り続けた。

「良かったら、今度はあなたのことを話してもらえますか？ 私は二週間の後にはここから去りますし、その、お友達や先生や修道女シスターさん達に話せないこととかあれば俺が、いや私が、聞いてあげられることも……」

なんと無様な。冷静な自分が、焦りながら口を動かし続けている自分を罵ののっている。このままではせっかく出来た彼女との接点がとぎれてしまう。その一点にしがみつくようにどうにか言葉を紡ぎ出しているにすぎないこの醜態は、ハードボイルドとはあまりにも

縁遠い。

それでも大上はしがみつきたかった。彼女との縁えんじに。何故これだけ必死なのか……自分でよく判らない。仕事に対する執着だけとは、どうも考えにくい。

彼女の何かがそうさせる。その何かとは……大上本人にもよく判ってはいない。ただ、ほっとけなかった。理屈ではなく直感で、彼女が何らかの不安を抱えているのが判る。それは彼女の言った「信心深いわけではない」という言葉が今でも妙に引っかかっているからなのか……やはり大上には自分の行動を冷静に分析など出来はしなかった。

月原がこの時の大上をどう見ていたのか……月原は軽く顔だけ振り返り一礼して、その場を駆けるように去っていった。今の大上に判るのはそれだけであった。

焦っている大上に、月原の頬が僅か、本当に僅か赤みが差していたことなど見えているわけもないのだから。

「なんか落ち込んでるね。どしたの？」

うなだれ何度も溜息をついている大上の様子を見て声をかけた角川だが、返事がない。ただの屍しかばねかとすら思えてしまう落ち込み具合に、さすがの角川もこれ以上は話しかけれなかった。しかし二度目となる報告の為に天道寺の屋敷へ集合したというのに、肝心な雇い主本主がこれでは、報告を始めて良いのか戸惑ってしまう。どうしたものかと角川は視線を天道寺に向けると、天道寺は苦笑しつつその視線に答える。

「ほっとけ。まあこっちの声は聞こえてるだろうから、そのまま報告してくれ、藤美。おいケン、お前の仕事なんだからしつかりしろよ？」

「ん……」

天道寺に声をかけられようやく顔を上げた大上であったが、落ち込み具合は変わらず。たれていた狼の耳を僅かに立てる気力はあるようだが。

しょうがないなど、今度は天道寺が溜息をつく。しかし聞く姿勢になったようである。たか、天道寺は角川に再度報告するよう促し、角川もようやく口を開くことが出来た。

「じゃあいい？ えつとね……学園長んだけど、評判は良いね。学園の中でも外でも。評判が良いって言うか……特に何も無いって感じ？ つかさ、みんな学園長なんかに興味ないしねー」

視点の違いはあれど、角川の調査は四方の証言と合致していた。目立つところが無い分、温厚そうな印象がそのまま高評価に繋がっているところだろう。また角川の情報源が彼女のメル友、つまり生徒達である以上、彼女が言うように普通学園長に興味など無いだろう。

「他の先生とかも、ケンちゃん(*)が気にするような話しはなかったなあ。あーでも、ケンちゃん格好いいって評判だったよー」

ここで少しくらい大上に何らかの反応があれば面白かったのだが、リアクションはゼロ。それだけ今大上が落ち込んでいるということではあるが、角川にとってみればこんなつまらないことはない。

「……でね、これだけじゃつままないから、もうちょっと学園長とかのこと調べたらさ、面白いものが見つかったよ(*)」

今度は反応あり。大上が興味ありげに角川の方へ顔を向けた事で、彼女はニヤリと楽しみに口元を緩ませた。

「七年前に学園長……えつと、名前は「木宮大介」だつて。で、この人が学園長になる前まで、一切パト女じょと関わりがなかったつてのは聞いてたっけ？ でね、パト女じょに来る前までは宗教学の教授をやつてたみたい。で、なんか教員免許も持ってたみたいで、それで学園長になつたんだつてさ。」

学園長の職に就く前に何をしていたかは、確かに気になる点ではあった。しかしこの程度では「面白いもの」と言うには少々物足りない。出し惜しみしている角川は、周囲の様子にニヤニヤしながら言葉を続ける。

「この教授やつてるときの事をネット辿つて大学のサーバで調べただけ……研究テーマが「異教・異文化との融合」だつて。ほら、昨日鷹丸ちゃんタカが蛇をどーたらとか言つてたじゃない。あれつばくない？」

この情報には、うなだれていた大上も思わず身体を起こし反応してみせる。むろん天道寺も小さいながら声を上げ驚いている。彼らの反応に、角川はとても満足げだ。

「なるほど……おそらくその研究を通じて聖パトリックがらみで学園との接点があつたんだらうな」

腕を組み自分の推測を口にする天道寺。大上はその推測に首を縦に振り同意した。

「そういえば、学園長は前任の学園長と親しかつたらしいんだが……その研究で知り合つたのかもしれないな。藤美、前任の学園長については調べてあるか？」

大上の質問に、満面の笑みを浮かべていた角川の顔に曇りが刺す。

「それがさ……無いのよ、データが。とりあえずサーバにはね。紙資料で残つてるかもしれないけど、そつちは私の専門外だわ。」

学園長が替わつたのが七年前。当時まだデジタルデータに切り替わつていなかったとしても不思議ではないが……月原の生徒名簿の件もある。もし故意にデータを残していないとすれば、そこになんらかしらの秘密があるのではと誰もが疑うところだろう。どこかに何らかのデータが残つていれば良いが、もしそのデータが本当になくしても、無い物を無いと確認すること自体が大切だ。それは骨の折れる確認作業だが、大切な調査。

「学園長は前任の事故死によつて、本人の遺言に従い学園長に赴任したと言つていたんだが……そのあたりも疑う必要がありそうだな」

温厚そうな学園長。その外見に隠された腹の底が、ますます黒く見えてくる。調査としては二日目までここまで調べが進むのは順調といえるのだが……しかし決定的なものは何一つ判っていない。異端教団カルトの存在も規模も、そして目的も一切が謎のまま。現状では学園長の怪しさばかりが浮き彫りになり、ただただ薄ら寒さを感じるばかりである。

「引き続き、学園長とその周辺の調査を頼むよ。特に前任の学園長についてな」

「えー、紙資料は面倒なんだけどなあ。」

渋る角川に、何のために制服まで用意してるんだよと促す大上。

「それと天道寺先生、学園長が前任の学園長から受けた遺言つての、本当の話かどうか確認できないかな？」

「だから先生は止めるつて……遺言も含め、一度有栖学園の理事長を通して学園の理事長や彼が在籍していた大学の関係者を紹介してもらつつもりだ。お前は学園外の調査が出来

ない状況だからな、そっちは任せておけ」

協力者達に感謝しつつ、大上はまた明日以降の調査について自分はどうするべきかを悩み始めた。

「ところで……」そんな折、これまで口を閉ざしていたメイドアイリンがその口を開いた。「月原さんの方は、進展ありましたか？」

がつくりとまたうなだれる大上。お前なあど苦笑しながらメイドを見る天道寺。笑い出す角川。発言者は一人、また口を閉ざし素知らぬ顔を決め込んでいる。

「おはようございます、大上神父。どうですか？ 少しは慣れましたでしょうか」

学園に潜入してから三日目。確かにそれなりに慣れ始めている。だがしかし、逆に戸惑い始めることもある。

「おはようございます。ええ、おかげさまで」

笑顔で返答するも、自分の顔が引きつってやしないかと内心心配している大上。なにせ相手は学園長。今一番警戒している張本人なのだから。

朝の登校。幾人もの女子学生が挨拶の声をかけてくれる中で不意に駆けられる男性の声に、大上は一瞬息を詰まらせたが、どうにか平然と怪しまれないように挨拶を返すことが出来た。

「そうですか、それは良かった。色々判らないこと、困ったことがあればいつでも声をかけてください」

笑顔で会釈すると、学園長はそのまま校舎へと向かった。校舎と教会は校門からは別の方角になるため、このまま学園長と並んで歩く必要は無かった。それは今の大上にとつて都合の良い状況。大きく息を吐き出し胸をなで下ろしたい心境だが、むろんそれを大勢の生徒が見ている前でやれるわけではない。

それにしても……大上は校舎に向かう生徒達の波から外れながら考え込む。やはり学園長は何度会つても温厚な印象が崩れることは無い。もちろんそれでも学園長を怪しんでいるのに変わりはないが、もしかしてこちらの勘違いか？ と認識を改めたくなってしまうのも否めない。ターゲットとなる人物や団体が悪であるとは限らないのがカウンターハンターの仕事。それだけに、学園長が本当に善人である可能性は充分にあり得るのだが……それはそれでより面倒な事態になるのは目に見えているだけ、尚更悩ましい。

「おはようございます……」

不意に、後ろから挨拶の声。もう生徒達からは離れているはずなのに……振り返った大上は、また一瞬息を詰まらせてしまう。

「おはようございます、月原さん……」

目の前には見目麗しい女生徒が一人、深々と頭を下げていた。

どうして？ 昨日の今日で、あんな別れ方をして、まさか月原の方から声をかけてくるなんて。大上は戸惑いながらも挨拶を返したが、学園長の時ほど誤魔化し切れはしなかった。

「あの、大上神父……昨日は、すみませんでした……」

顔を上げ、月原が謝罪の言葉を口にする。どうやら月原も昨日の一件を気にしていたようだ。月原にしてみても、大上の言葉に動揺し逃げるように帰ってしまったのだから、気にして当然といえば当然だろう。大上が月原が動揺していたことよりも変に必死なアピールをしてしまった事を後悔していたように、月原は大上のアピールにおかしな点を感じるより、相手の言葉もろくに聞かないで逃げ帰ったことを後悔していた。

まずは謝罪しなければ。その思いを抱えたまま登校したところに大上の後ろ姿を発見した月原。思わず駆け寄り声をかけ、そして謝罪は出来たものの、ここから先の言葉が全く思い浮かばない。どうしよう。月原はまた一人で動揺し始めている自分に気づき、余計に言葉を詰まらせた。表面上こそ変わらない月原だが、心中ではあたふたするばかり。

「いえ、こちらこそ……」

言葉に詰まっている間、大上の方から語り始めてくれた。これは月原にとって、僅かにホツと出来る間ではあるが……逆に今度は大上が悩む番。さてこの場をどの言葉で繋げばいいのか……。

「あの……」

二人の声が重なった。

なんだこのラブコメな展開は。よくあるシチュエーションに、思わず大上は吹き出してしまった。月原は笑いはしないもののふっと肩の力が抜けていた。

「失礼……どうぞ、月原さん」

場が和やかになった事に感謝しつつ、大上は月原に言葉を譲る。譲られた月原は意を決して、ようやく浮かんだ言葉を口に始めた。

「昨日の続き……また今日の放課後で、よろしいでしょうか？」

「えっ、ええもちろん。こちらからお願いとすることでしたから」

切れかかった縁えだじが繋がった瞬間だった。歓喜の声を上げたい衝動を抑えつつ、大上は丁寧に言葉を返す。

「はい。では……」

月原は軽く頭を下げ、登校する生徒達の中へと戻っていった。僅かの間それを見送った大上はくるりと方向を変え、教会へと歩き出す。

背を向けた二人は互いが見えていないから気づかないだろう。二人共が妙に足取り軽い事を。

「……なんか、不気味なくらい機嫌良いね。どしたの？」

昨日の落ち込み具合を知っているだけに、角川は終始にやけながら資料を探している大上の変わりようを見て、思わず背筋が僅かに寒くなった。

「ん？ 別になんでもないけど……」

絶対にそんなことはない。それだけは角川にも判る。午前中に紙資料を調べる約束をしていた角川は、資料室で大上和落ち合ったわけだが……彼が資料室に入ってきた時の上機嫌っぷりは、引いてしまうよりむしろ気でも違えたかと心配したくらいだ。

まあ、とりあえず角川にも、どうしたのと尋ねてはいるが大上に何があったかは推測できる。間違いなく月原とのことで進展があったのだろう。それは判るが……なんだろう、この気味悪いほどの上機嫌*)っぷりは。

「……惚れたね？」

「ばっ、そんなんじゃねえって……」

判りやすい男だ。角川もさすがに苦笑せざるを得なかった。

「いや、なんつーの？ ハードボイルドには美女が似合っつていうか、ほら、そーいうことだよ」

なにがそういうことなのか、全く説明になってないが……大上は言葉にならない自分の感情をどうにか無理矢理言葉で釈明した。

正直、自分でもよく判らない。何故ここまで心が熱くなるのか……。

「そもそもさ、俺の好みは、こう……シュツと口先の尖とがった、毛並みの美しい女性なわけ

で……」

「毛並みって……」

「ようするに、^{ウエア・ウルフ}同族が好みだと言うことなのだが、妖怪でも人間よりの角川にしてみれば、^{ウエア・ウルフ}狼男が持つ美の基準は理解しがたい。」

「いいから、黙って探してくれよ……あまり長い時間いられないんだからな」

実際には時間に余裕などいくらでもあるが、これ以上この会話を続けさせない為にも強引に作業に没頭させたかった。

命じた手前、自分も資料を手に取り調べていくが……意識の半分は月原のことに向けられていた。本当にどうして、こんなにも彼女のことが気になるのだろうか。大上は自己解析を試みている。

確かに彼女は美人だ。異性として非常に魅力的なのは間違いないが、表面的な魅力にはかり目を奪われているとは思えない。とすれば、他に何が？ 女性に惹かれる理由として、例えば笑顔が素敵だとか草草が可愛らしいとか色々あるだろうが、怒りの形相と、それは対照的な無表情な彼女しかしらない自分が、そのような理由で惹かれているとは思えない。とすれば、いったい彼女の何が自分をこんなに熱くさせるのだろうか……。

パラパラとページをめくっては資料を本棚に戻し、また新たな資料を手にとってはページをめくる。こんな状況では探しているものを見逃してしまいそうだが、その危惧すら今の大上には思いつきもしない。

「ん？」

しかし大上はそんな状況で手を止めた。探しているものが見つかったのだ。

「あつた？^(^o^)」

小さな声であつたが、静かな資料室で大上の声は良く届いた。角川は大上に近づき彼が手にしている資料をのぞき込む。

「どういう事だこれは……」

大上達が探していたのは、前学園長の資料。どこか上の空だった大上が、それでも目当ての項目を発見できたのは、もしかしたら上の空……意識半分で彼女のことを考えていたからなのかもしれない。

「なにになに……って、え？ マジで！^(o)」

月原裕也。前学園長の名前として、確かにその資料にはこう記されていた。

例えば佐藤とか田中とか鈴木とか、日本人の姓としてポピュラーなものならば、ただ同姓だけでなく何の繋がりもない別人である可能性は大きい。しかし月原という姓は珍しいと言うほど珍しくはないものの、よく見かけると言うほど多い姓でもない。

月原恵美と月原裕也。何の繋がりもないと思う方が不自然だろう。

「お待たせしました……」

放課後、朝約束したとおり月原は教会の礼拝堂に姿を現した。大上は職員室で彼女を待っていて良かったが、頻繁に月原が訪れるのを他の先生達に見られるのはまずい……というより恥ずかしいと思ひ、礼拝堂の長椅子に腰掛けて待っていた。

むろんそれだけではなく、午前中に見つけた前学園長の名前についてゆっくり考える場

が欲しかったというのもある。あれから角川と資料を探したが、月原裕也という名前以外に、彼に関するデータは一切見つけれなかった。学園に関する資料を基本としている以上、一個人のデータが詳しく記されている必要はないのは確かだが、それにしても何か引っかかるものを二人は感じていた。まるで意図して削除したのではないかという、そういった作弄的なものを……。

「あの、大上神父？」

「ああ、すみません。少し寝てしまったようですね」

当然嘘だ。ただ腕を組み目を閉じて考え込んでいただけで、寝てなどいられる心境ではなかった。

「すみません……本当にお待ちせしてしまっただようで……」

「いやいや、そんな待つてませんよ。まだ三日目で緊張が続いていたようで、少し疲れていたようです。月原さんが気に病むようなことではありませんよ」

それでも今度は大丈夫ですかと氣遣ってくれる月原に、大上の心は痛んだ。

そして悩んだ。さて、本人に直接尋ねるべきかどうか。

「今日は……何を話すればよろしいでしょうか？」

月原が尋ねる。そして大上は口を開いた。

「そうですね……では、生徒さん達の事を少し伺いたいのですが……」

やはり躊躇してしまっ。そもそも月原から見ても、大上が突然前学園長のことを尋ねてくる事はあまりにも不自然で、もし血縁関係ならば警戒して当然。そうでなくとも、月原の両親は……彼女の話によれば……殺されているのだから尚更。

殺されている？ 大上は月原の話聞きながら妙な繋がりに思い当たり困惑し始めた。

前学園長は事故で七年前に亡くなっている。もし月原の両親が殺されたのが七年前だったら？ 死因が事故ではなかったら？ もし、これらが繋がったとしたら……それは何を意味しているのか？

「生徒さん達はあまり教会に訪れることはない伺ったのですが、実際にそうなのでしょうか？」

今はよそう。大上は自分の推測を頭から全て追い出し、月原との会話に集中するように努めた。

「はい。我が校は俗に言うミッションスクールですが、布教は押しつけるものではないという方針のようです。その為、生徒から率先して教会に訪れるのは、懺悔室……というよりは相談窓口に近い役割ですが、そこで色々と神学科の先生達に話を聞いてもらう時ぐらいでしょうか」

月原の話は既に四方から伺っている話と合致している。だからだろうか、話を聞きながら不意にまた疑問が脳内に沸き、それをまた追い払う。大上はそれを何度も繰り返し返していた。

そんな大上の心中など知るよしもなく、月原は熱心に学園事情を大上に語っている。だからこそ尚更に、大上の良心は先日同様しくしくと痛み出していった。

しかしそれとはまた別に、大上は痛む心が温かく包まれる何かを感じてもいた。

もしかして本当に、惚れてしまったのか？ 数刻前角川に指摘された通りに、俺は惚れてしまったのだろうか？

これが俗に言う一目惚れというものだろうか。 ウエア・ウルフ 狼男 の自分が、よもや人間の女性に惚れるとは……いやいや、そんなはずはない。大上は心中で頭かぶりを振り一瞬沸いた考えを否定する。仮に惚れたとしたら、彼女のどこに惚れたというのか。大上は先ほどまで頭から追い出したかった二人の月原に関する疑問はとうに忘れ、代わりに沸いてしまった自分への疑問と戦っている。

月原は確かに美人だが、その容姿に自分が惚れたとは考えにくい。角川にも話した通り、自分の好みとはかけ離れているから。また性格にいたってもある程度把握し始めているが、まだ出会って三日目で彼女を知った気でいられるほど愚かではないつもりだ。考えれば考えるほど、彼女に惚れている証拠など何もない。にも関わらず、この暖かな感情は何故湧き上がるのか？

あれだ。ハードボイルドは惚れっぽいんだよ。毎回毎回美女が現れてはラブロマンスを繰り広げる。それがハードボイルドってもんだろ。それか？ ああ、それだ。大上が心の中で出した結論を、もし第三者が垣間見られたとしたらなんと言っただろうか？ おそらく多くの第三者はこういっただろう。愚か者アホ、と。

そもそも……今はこうして話をしているが、月原は大上を敵かたきとして狙っているという非常にアンバランスな関係にある。そこへ大上はさらなる不安定材料を加えようとしているが、今後二人の関係がどう展開していくのか。それを当人自身が推測するにはあまりにも難しい問題だ。

「……なので、日曜になると多くの方が礼拝に訪れています」

話は日曜礼拝のことに触れていた。月原の話はやはり四方の話と合致しており、多くの教徒が学園内の教会に訪れているらしい。日曜礼拝に関しては研修員として重要な話で、大上は研修員という偽装の為にもと、念入りに話を聞いていた。

「礼拝は学園長……木宮神父の話などを中心に行っています。その後は有志の方々によるボランティア活動……主に教会内と周辺地域の清掃を行っています」

日曜礼拝自体は特に変わったところは見受けられない、ごく普通の、どこの教会でも見られる活動内容のようだ。ただ一点気になることがあるとすれば……学園長が中心になっている点か。彼がグノーシス主義の中核的人物だと大上は疑っているが、もしその通りだとすると、この礼拝という機会にグノーシス主義へ取り込もうと画策かくさくしているのではないだろうか？ あるいは礼拝に訪れている人々の半数以上が既にグノーシス主義の異端教団カルト信者である可能性もあり得る。これは一度、その日曜礼拝に潜入する必要があるだろう。大上は小さいながらも得られた手がかりに満足していた。

「月原さんも、日曜礼拝には参加されているのですか？」

大上の質問に、月原は僅かに目を伏せながら、はいと一言だけ答えた。

どうも様子がおかしい。先ほどまで滑らかに動いていた唇をとたんに固く閉ざしてしまった月原に、大上が疑問を感じるのは当然のことだろう。そもそもこれまでの様子から、月原はいつも「信仰」の話になると口を閉ざしがちになる。彼女は間違いなくグノーシス主義の信者であり、信仰に対して口を閉ざすような事はないと思えるのだが。いやむしろ、彼女がグノーシス主義だからこそ正当派な信仰に対して後ろめたさを感じているのだろうか？ それもおかしな話だろう。後ろめたさを感じるようなら、自ら槍を手にし立ち回る武闘派の異端教団カルトに身を置くとはとても思えない。

「月原さん。昨日もお話ししましたが……」

伏せ目がちになつた月原に代わり、大上が口を開く。

彼は賭に出た。この後に続く質問を彼女がどう捉えるかによつて、また昨日のように逃げられてしまう可能性は充分にありえる。逃げるだけでなく、もしかしたら拒絶されることも。拒絶か……その言葉に、大上は言いようのない不安をかき立てられた。しかしもしこの賭に勝てば、月原との距離を一気に縮められるだろう。それは大上にとって、様々な意味で喜ばしいこととなる。

さあ、彼女は どう出る？

「私は正式な神父ではありません。有栖学園ありすでの教会運営に携わるのに都合が良いので、神父の格好をしているに過ぎません。ですから、あなたが先生や本物の神父に証せない悩みがあるなら、私に話してみませんか？ もちろん他言はしませんし、いずれ私はこの学園を去る身ですから、悩みを吐き出すには月原さんにとって都合良いと思いますよ？」

ガツチガチに硬い笑顔をどうにか作り、大上は月原に打診を試みた。

しばしの沈黙。それはそれは、大上にとつてとても長い沈黙。さて、月原にとつてはどれほど長い、そしてどれほど意味のある沈黙なのだろうか。

その答えは、やがて月原の口からもたらされる。

「……明日もまた、尋ねてもよろしいでしょうか？」

賭に勝つたかどうかは定かではない。しかし負けてはいない。そんな微妙な判定だ。しかし最悪の結果は逃れ、何より明日へ繋がったことをここは喜ぶべきだろう。

「ええ、もちろん。明日もここでお待ちしますよ」

満面の笑みで、心からの笑みで、大上は返答する。月原は席を立ち、大上に一礼すると駆けるように礼拝堂を出て行った。その様子を最期まで見届けた大上は、見届けた後で握り拳を作りながら、ヨシッ！ と歡喜の声を上げた。

何の飾り気もない、殺風景な部屋。月原はそんな自室に戻り、制服のままベッドの上へと倒れ込んだ。

何故だろう……月原は教会を出てここへ戻るまでの間、ずっと考えていた。

何故、こんなにも胸が高鳴るのか。月原は自身の動悸どうきがここまで激しくなることが信じられないでいた。

格好良い人だと思う。それは客観的に見た、大上への批評。自分がそんな大上に惹かれたとは少し考えづらい。自己評価だが、自分は面食いではないと思っており、もしそうなら好きなアイドルの一人や二人いてもおかしくないが、幸か不幸か、ごく普通の女子高生が騒ぐような人達にはまったく興味はない。そもそも自分の興味は……などと思いつける最中さなか、月原は自己嫌悪に陥った。

普通の女子高生が興味を示すものに興味がない。興味を持つとうとしない。それは性格や好みだけの問題ではなく、自らに課した十字架のようなものだった。自分にはやるべき事があり、その為への労力は惜しまない。だから余計な誘惑に惑わされてはいけない。

敵討ち。両親の敵を討つことが、自分に課せられた宿命なのだ。月原はそう信じていた。信じたかった。信じなければ、この七年間自分を支えられなかった。ならば今することは

何か？ 月原は自問自答し始める。ようやく敵を見つけ出す糸口をつかんだのだ、不意に現れた異性に動揺している場合ではないだろう。そう自分に言い聞かせながら、月原はベツドから起き上がりまっすぐ先を見据えた。そこにはカレンダーと、黒い布に包まれた長い棒状の何かが。

「あと二日……」

カレンダーに視線を移し、月原はつぶやいた。カレンダーには、前日まで多くのバツ印が記されており、今日より二日後の日付には大きく丸印が記されている。

明後日は満月。 ウェア・ウルフ 狼男 が街に現れる日。

同級生達の噂になど興味の無かった月原が、不意に耳にした、興味のある話。それが都市伝説的な ウェア・ウルフ 狼男 の噂。誰かの作り話とも思える与太話だったが、月原はそれを聞き流すことなど出来ず、自ら噂を確かめに行ってみたところ……その真実を目の当たりにした。そしてようやく訪れた好機を神に感謝しつつ挑み掛かり、惨敗したあの日。あれからそろそろ四週間。また次の機会が訪れようとしている。

次は負けない。負けられない。決意を胸に、負けぬ為に今できることしよう。月原は壁に立てかけてあった棒状のもの……槍を手に、制服のまま部屋を出た。異端教団 カルト の集会場での訓練が、次の勝利へと繋がるはずだ。満月の夜へ向けて、そして……まだくすぶっている、大上への感情を押し殺すためにも。